

Title	意匠学会第46回大会報告
Author(s)	島先, 京一
Citation	デザイン理論. 46 P.146-P.149
Issue Date	2005-05-30
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/11094/53305
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

意匠学会第46回大会報告

島 先 京 一

意匠学会第46回大会は、2004年11月19日から21日に3日間、成安造形大学を会場に開催された。大会のプログラムは以下の通りである。

11月19日（金曜日）プレイベント（大学院学生による研究報告のセッション）

研究発表 1 神戸大学大学院総合人間科学研究科 荒木 泰子
「1930年代日本における鉄道車輛の流線型について
—— 鉄道省車輛モハ52を事例として」

研究発表 2 学習院大学大学院人文科学研究科哲学専攻博士前期過程修了生 安城 寿子
「モードを検証する —— 川久保玲・初期の創作にまつわる言説と実際」
以上、座長（進行役）成安造形大学 島先 京一

研究発表 3 名古屋大学大学院人間情報学研究科博士課程前期過程 定国 伸吾
「使用痕跡と偶然によるインターフェース『フェチ・システム』の試作」

研究発表 4 福岡女子大学大学院修士課程 宮崎いづみ
「コーディネーションツール『Fグリッド』の研究
—— 『リズムのパターン〈グラデーション〉』の接続方法の類型とその表示」
以上、座長 京都工芸繊維大学 櫛 勝彦

研究発表 5 大阪芸術大学大学院博士課程 原田 紀子
「ジョージ・シーガルの人体像をめぐる」

研究発表 6 京都工芸繊維大学大学院修士課程 竹澤 秀孝
「初期具体美術協会について」
以上、座長 京都工芸繊維大学 太田 喬夫

11月20日（土曜日）

研究発表1 成安造形大学 島先 京一

「サイバースペースの抑圧的な局面について
— 速度、善意、選択、そしてマクダナルダイゼーション」

研究発表2 滋賀県立大学 面矢 慎介

「米国における小型調理家電の発展過程 — 1920～50年代を中心に」

以上、座長 京都市立芸術大学 渡辺 真

総 会

研究発表3 大阪市立住まいのミュージアム 畑 智子

「近代輸出工芸の受容 — 19世紀の在外日本陶磁コレクションを中心に」

研究発表4 立命館大学（非） 要 真理子

「芸術家による大衆のためのデザイン — オメガ工房の前衛性」

以上、座長 神戸大学 梅宮 弘光

懇 親 会（会場成安造形大学カフェテリア「結・紀伊國屋」）

11月21日（日曜日）

研究発表5 滋賀県立大学 森下あおい

「浮世絵に描かれた小袖着衣形状についての定量的考察」

研究発表6 同志社大学 岩崎 陽子

「香りと記号 — 源氏香之図をめぐる」

以上、座長 京都工芸繊維大学 並木 誠士

研究発表7 京都女子大学 鈴木 佳子

「ウィーン工房の100年展（2003）に参加して」

以上、座長 大阪芸術大学 藪 亨

一般パネル発表懇談会

発表者

夙川学院短期大学	小川 忠彦
「Woody Stripe Venus 凹」	
大阪都市協会	北辻 稔
「見えないものを見る……ピンぼけ山歩」	
京都造形芸術大学	佐藤 博一
「編集とブックデザインの仕事1990-2004」	
京都市立芸術大学	滝口 洋子
「ヒューマンボディデザインの実験 —— 第2幕」	
神戸文化短期大学	原田 純子
「Mode de Papier? —— Courbure ——」	
(株)ICD 現代デザイン研究所内研究所	松田 真平
「法隆寺金堂壁画山中羅漢図の原寸復元イメージ画の提案」	
名古屋市立大学	山口 良臣
「ささやき声によるインスタレーション」	
大阪芸術大学	吉原 卓男
「環境デザインの地域的特性を造形との関連において考察する —— 調査報告」	

以上、座長 成安造形大学 島先 京一

特集パネル発表「デジタル時代における手描き表現の意義」懇談会

発表者

成安造形大学	井上 直久
成安造形大学	大原 雄寛
成安造形大学	田中真一郎
成安造形大学	永江 弘之
座長 成安造形大学	大原 雄寛

本年の大会も、大学院において研究活動を行っている若手研究者の発表を聞く、イベントから始められた。今回のイベントは、偶然ではあるが、近現代のデザイン史、デジタル文化、現代美術の3分野にテーマが集約されたが、このことは本学会のよい意味での守備範囲の広さが反映されていると考えることができよう。何れの発表も、盛んな質疑応答が展開され、

拝聴者にとっても発表者にとっても、今後の研究を進めていく上での適切な刺戟を得ることができたのではないだろうか。

2日目と3日目に行われた、研究職にある会員による発表においては、デザイン史の分野に属する研究発表が多く行われた。特に本年は、日本のデザイン史、あるいは工芸史に関する研究が目立ったのが、特徴的であるといえよう。

パネル発表は、成安造形大学のギャラリー、アート・サイトにおいて行われたが、専門の展示空間を用いたことと、展示を行う際に成安造形大学芸術計画クラスの学生及び、ティーチング・アシスタントの諸氏の協力が得られたことにより、本格的な展示を行うことができた。大会当番校の不手際により、運営において会員諸氏に多大な迷惑をおかけした本年の大会であったが、パネル発表における展示に関しては、手前味噌ではあるが、会員諸氏に満足頂ける実施が行えたのではないかと自負している。

また、例年展開されるシンポジウムに代り、特集パネル発表という形式で、成安造形大学のイラストレーション・クラスを指導する、4会員による作品発表と口頭による質疑応答を行った。一つの研究機関の取り組みを特集として取り上げたことに関しては、学会という組織のもつべき性質を考えると、問題があったかもしれないが、国公立私立を問わず、大学という機関が置かれている厳しい状況に照らし合わせた時に、一つの方法ではないかと考え、あえて実施させていただいた。

2日目の夕刻には、成安造形大学内のカフェテリア、結・紀伊國屋において懇親会が催され、新入会員も含めた、愉快的な宴がもたれた。

最後に繰り返しになるが、当番校の不手際により、会員諸氏ならびに学会事務局に多大なご迷惑をおかけしたことをお詫びしたい。